第三章

研究方法

3.1　研究方法

方法とは、しなければならないプロセスでのことあるが、技法とはその方法を使うためのプロセスのことである（Sudaryanto、1993：9）。研究では、方法とは研究の問題を解かすためのプロセスである。このプロセスは計画、実施、結論まで体系的に進める。

Sutedi（2009：58）は、記述的研究は現実の問題に答えるために科学的な手順で今起こっている現象を記述し、説明する研究のことだということである。

本研究で、筆者は認知言語学に基づき、諺における意味間を記述する質的研究を行う。認知言語学は、特に、統合認知的な単語の意味を記述し、単語を研究することに貢献を与える。Sutedi（2009：192）におけるモミヤマ、ホンダ、カシノなどによると、意味の拡張は、隠喩、換喩、堤喩の三つの修辞技法で記述できるということである。

3.2　手段とデータ収集

サンプルは『日本の諺』、のような諺に関する本と『こじ諺辞典』、『諺の泉』のよう日本語の諺の辞書から取り入れる諺である。その他、関係のあるウェブサイト、日本語のビデオ（ドラマ、映画）からもサンプルを収集する。

本研究も手段としてアンケートにより日本人における諺の使用を観察する。調査の結果はその諺が将来筆記でも口語でもまだ使われるかどうかを予測する。

十人の学歴が高い日本人の大学生と教師が回答者である。アンケート五つの選択を与えるという表の形で制作する。アンケートは有名な諺と有名ではない諺に関する Arimi (2005)の研究から十五の諺をランダムで取り入れる。その諺から、記憶による諺が五つ、実験による有名な諺が五つ、実験による有名ではない諺が五つある。アンケートを使用しても、そのアンケートの結果が質的に分析するのに使うから、本研究は量的ではない。アンケートはＥメール、「Facebook」というソシアルネットワークを通して配布する。

3.3　データ分析技法

Sudaryanto（1993）によると、言語の研究は２つの大きい段階で行うと述べられる。一段階目は問題を発見する段階である。二段階目は

問題を解決する段階である。本研究で、筆者は次のようにその３つの段階を行う。

a. 準備

本、ビデオなどからのデータ収集は諺をリストにするためにデータカードを使用する。そうすることにより、実例のような具体的な例を説明できるのである。それから、教科書から記録し、ビデオを観察し記録するという技法を使用する。筆者自身は研究の手段として扱いする。

b. 実施

認知言語学は多義語における意味間の関係を記述する言語学の分野の一つである。この分野は全ての言葉にある意味の変化と発展は偶然形成したのではなく、理由があるのだという考えに基づき説明するものである。多義語における意味を記述するには、言語活動が隠喩、換喩、堤喩から欠かせないため、その３つの修辞技法を使うのである（Sutedi、2009：85）。

データを分析するために、いくつかの段階を辿る。収集した諺のデータの辞書的意味はまず分析する。各諺の意味が分かったら、諺を参照にし、暗示的意味を分析する。それから、

隠喩、換喩、提喩を使うことによりその辞書的意味と暗示的意味を認知言語学上で関連し、研究をする。本研究で使用する技法は言い換え技法である。本研究で使用する技法は言い換え技法である。言い換え技法は意味を変えずにほかの方法で同じ言語を使ってある観念を述べる技法である。会話使用するとある言葉遣いを広げられる。そして、その諺は文あるいは会話に実用する。

Arimi(2005) の研究を参考したアンケートは 5 コラムで１５つ諺を入れる表の形で制作して、十人の回答者に分配する。書き込んだアンケートを分析して、その諺が将来まだ使われるかどうかを予測する。

c. 発表

この段階は、本章における問題の構成に対する結論した分析の結果を体系的に発表するのである。それから、今後の課題のために、様々な意見をうける。本研究の結果から日本語学習に諺の理解する貢献を与えられたらいいと思う。